

椎地四郎殿御書

先日お話しのであったことについて、彼の人の方へ尋ねましたところ、おっしゃったとおりで何も違いがありませんでした。

それにつけても、いよいよ信心を励^{はげ}まして、法華經の功德を得られるがよい。中国の師曠^{しこう}の耳と離婁^{りろう}の眼をもつて、法華經を聞き、法華經を拝見^{はいけん}されるがよろしい。

末法時代には法華經の行者は必ず出現するに違いない。ひとえに大難がやって来れば、その信心はますます強盛になり、その悦びはいよいよ大きくなるだろう。

例えば、火に薪をくべて火が盛んにならないことがあるか。多くの流れが大海へ入っても、大海が河の水を押し返すことがあるか。法華の行者という大海に、大難という多くの河の水が次々に入っても、押し返すこともなければ、それをとがめ立てすることもない。多くの河の水が入らなければ大海とはならない。それと同じように、大難が無ければその人は法華經の行者ではない。

天台大師が摩訶止観に「多くの流れが海に入り、薪が火を盛んにする」等と言うとおりである。もし法華經の法門を一文でも一句でも人に語ることができれば、それはよほど過去世の因縁が深かったものと思われるがよい。

法華經の方便品には「また正しい法も耳にしない。このような人びとを悟りの世界へ導き入れることは、並大抵のことではない」とある。この文は、「正法」とは法華經のことであり、法華經を聞いたことのない人は救いがたい、という意味である。

また、法師品には「もしも、良家の子息がいて、仏の滅後において、よくひそかに、たった一人のためにも法華經の一句を説くならば、心して知るがよい。この人は如来の使いである」と説かれており、在家でも出家でも、男でも女でも、たった一句でも人に

語り伝える人は如来の使いであると言われている。貴殿は俗人であり、経文にいう「良家の子息」である。

この法華経の文をほんのわずかでも聴聞ちやうもんして、それを自らの神たみに銘めいじる人は、この生死の迷いの大海を渡ることのできる船である。妙樂大師は「たとえ一句であつても法華経の経文がたましいにしみ込めば、それはみな悟りの岸に至る資けとなり、もし思惟しゆいし修行すれば、それは必ず悟りの岸に向かう船となる」と述べている。

生死の迷いの大海を渡るには、妙法蓮華経の船でなければとても叶わない。法華経の薬王品に「渡りに船を得たようだ」と説かれる船について申せば、一代教主の大覚世尊が広大無辺の方便と智慧を持った船大工として、四味八教というさまざまな教法の材木を取り集めて、「正直に方便を捨てて」と削り直して、「邪と正は一つである」と切り合わせて、「醍醐味にして一実乗」の釘を丁と打って、生死の大海へ押し浮かべ、「中道という絶対不二の真実」の帆柱に「十界十如・三千諸法」の帆を懸けて、「諸法実相」の追風を得て、「信心を以て入ることを信た」一切衆生を載せて、釈迦如来が楫こを取り、多宝如来は綱手つなでを取って仏力を添え、上行等の地涌の四菩薩が力を合わせて、ぎっこぎっこと漕いで行かれる船を「渡りに船を得たような」の船とは申すのである。

日蓮が弟子・檀那等はこの船に乗ることができず者である。くれぐれも信じなされよ。四条金吾殿に見参されることがありましたならば、よくよくお話しされるがよろしい。委しいことは又々申しあげます。

恐々謹言。 四月二十八日 日蓮（花押）

椎地四郎殿へ。